

## 久遠のみ座

「君もつと勉強したまえよ。学生がなまけてはいけないよ。」

「あなた、何事をする時にももつと気をつけて丁寧に綿密になさいよ。」

「そうあなたのように何も彼も、ひがんで、まがってとるものではないのです。」

こうした他人からの忠告や教化を受けた時、私の魂の動きをじつと見つめます。生意気にも私の魂はすぐその忠告や教化をおしのけてしまおうのであります。

「何だやかましい。それ位のことわかつているさ。」

「そんな小さなこと、やかましく言わなくてもいいではないか。」

「他人に忠告がましいことを言うよりも、お前自身に気をつけたらどうだ。」  
そんな風に一切の教化に従わない強情な魂が腹のどん底に動いています。

邪見傲慢の悪衆生とはこうした魂の強い者を言うのでしよう。傲慢、自慢の心は何でも自力でたたれると思う心であります。孤立して生きて行こうとする心であります。全ての教化をふりすててしまふ心は、自分ほど事理もののわかつた者はいないと、鼻の高い心であります。自分のほんとうを知らない天狗であります。自分を過信している者、自慢心でいる者に、他人の忠告や教えが耳に入ろう道理がありません。

私は私のこの心を見つめて泣くのであります。

鼻もちもならない汚い心であります。太る心芽のとまった心であります。修養も向上もなくなつた心であります。三世諸仏のみにかなわぬ心であります。夫は妻のこの心に愛想をつかします。妻は夫のこの心に苦しみます。親は子供のこの心について心配します。子供は親のこの心のために親から離れてゆきます。争いはこの心から生れるのであります。傲慢心のあらわれた所は修羅道にかかります。他人から愛せられない心であります。他人を真に愛せない心であります。

もし人が謙虚なへり下つた心になることが出来るならば、世間一切は教えに満ちているのであります。三才の童子の言葉にも、金言は語られています。ただ私どもはあまりに高慢なのであります。一切諸仏は心に一物持たないで、静かに一切諸仏の声を聞くのであります。一切諸仏はこの邪見傲慢の心のない方であります。真実に「聞」の世界に出た方であります。

諸仏は心のわだかまりなく思いのままを説法します。そうして何ものにも動かされない信念に住していられます。聞くことよって動揺は致しませぬけれども、素直に諸仏の説法を聞いて、それを讃嘆せられます。諸仏こそ、ほんとうに聞き得る世界に生れ出でた方であります。

諸仏にはこの、汚い醜い、一切の教化をしりぞける、心の動きはないのであります。一切の教化をしりぞける心は悪魔であります。私を迷い深く導いて行こうとする悪魔の心であります。私どもはどうすればいいのでしょうか。

静かに教化の前に坐して、心から耳をかたむけることの出来る人は恵まれた人であります。私は何のわだかまりもなく心のありたけを捧げて、一切の教えの前に信順する素直な心の方を拝みたいほどの心がいたします。

仏は本願成就文で、「聞けよ」と私どもに教えて下さいました。聞くことによつて真実に永遠に生きる道は開けて来る。唯々聞くのであります。腹に一物持たないで聞くのであります。後生の一大事については、心の糧は聞くことによつて得られるのであります。「聞其名号」この四文字こそ一切衆生の魂の内ほんとうの道の開けて来る唯一の方途であります。体には食物を口からとりません。魂の食物は心耳みみから聞くことによつて得るのであります。困難な苦行によらないで、ただ聞くことによつて広い世界に出られるのは、易行の他力であります。

けれどもそれは幼児のように素直な心の持ち主にとつてこそ、たやすい道でありまされども、一切の教化を退ける悪魔の巣くう者にとつては、難中の難これにすぎた難はないのであります。そこでただ聞くということも難しい道になってしまうのであります。

釈尊は大経五悪段に仰せられました。

「慈心教誨し、其をして善を念ぜしめ、生死善悪の趣、自然に是れあることを開示すれども、肯て之を信ぜず。苦心ねんごうに輿に語れどもその人に益なし。心中閉塞して意開解せず。大命將に終らんとして悔懼くわいもごも至る。予め善を修せず、窮るに臨みて方に悔ゆ。之を後に悔ゆとも將に何ぞ及ばんや。」

何という徹底した教えでしょうか。高慢な者への鉄鎚であります。「慈心教誨し」慈悲の心で教えてやつても、との心であります。慈悲の心から出た教えすら、傲慢な心ははねつけるのです。「生死善悪の趣、自然に是れあることを開示すれども、肯て之を信ぜず。」自然の道理、因果の道理によつて、善いことをすれば善い報いがあり、悪いことをすれば悪い所の報いを受けねばならぬことを開示おしえしても、それを信ぜないのであります。如何に「ねんごうに語れども」邪見傲慢で心の扉を閉じてしまつて「意開解せず」であります。

こうした鏡に自分を写した時、心の奥ははつきりと照し出されてその見苦しきにおどろきます。そうして私どもはこの心と戦おうとするのであります。あとかたもなくこの心の悪魔を追い払おうと苦心するのであります。この悪魔がいる間、私の真実の道は開けてこない気がするのであります。

ある地で講演の開かれた時でありました。一人のおじいさんが宿をおとずれました。そうして私に申します。

「先生！私の言うことを聞いてくらしやいや。わしは今日まで六十何年生きていますが、あまり悪いことをしたことはない。人のものを取ったこともなければ、格別無理をしたこともない、出すべき金を出して来た。善い人間でもあるまいが悪い者とはさほど思わん。地獄者と聞けど何ともない……。」

私はそれを聞いてただ、高慢な男よ、と思つていましたが、そのおじい様は更に態度を一変して語り出しました。

「先生！ このじい奴は、邪見で、高慢で、鼻もちもならぬ奴です。このじい様の性根がおどろくほど、たたくとも、けるとも何となりとして御意見して下さい。」

おじい様は泣いています。私はそれ見た時、思わず念仏いたしました。何という尊い高慢のなくなつた心でありましょう。この心こそ、自分の高慢な心を見て泣いている尊い魂の目覚めであります。果せる哉、じいさんは涙の中から念しかしつつも「先生！ この致方のないじいの汚れた強情我慢な心こそ、み仏様のお慈悲のおめあてであつたとは、どうしたお慈悲でありましょう。」と語りました。

そうです。そうです。これが人間最後の目覚めであります。

彼のじい様は、高慢我慢のとれない泥凡夫だと、心の角を折られたのです。折らなのままに折られたのです。折れない心との戦いをやめて、折れない自分に泣いたのです。そうして、折らないままがまるめとられたのです。高慢な心をいじめていたのが、主客顛倒してその折れない心を抱いてやつたのです。否、折れないままが、南無阿弥陀仏に燃え上つた心によつて抱かれたのです。

私どもの心がちよつと美しい物語に感動した時などには、我慢な心もなくなつたようであります。一切の醜さを失つたようにも見えます。けれども心の奥にはやつぱり、このどうにも出来ない心が悪魔のように動いているのであります。この心と戦つて、全くなくしようとして、それがなくなつたところに信仰を築こうとするのを自力というのであります。けれどもそれは百年河清を待つのであります。取れない自力我慢をはびこらすのではありません。けれども、自力我慢をとりつくすことは出来ません。自力我慢をやめようとする努力を捨てるのです。そうしてとれないままが慈光に抱かれます。そこには真に邪見傲慢のすたつた世界が開けて来ます。

私どもの心の本丸には悪魔が立てこめています。そうして哀れや「我」はこの本丸から追い出されて淋しく眩劫流転の旅に出たのであります。悪魔は主、我は客、そうした心の有様が救われない者の心の内にあります。

私どもの心の内からは、貪欲の、瞋恚の、愚痴の、赤鬼、青鬼、黒鬼、一つ目小僧、牛頭、馬頭、幽霊、群賊、悪魔、あらゆる軍勢が生れ出でては「我」を攻めます。「我」は衰え、「我」は痩せ、「我」は迷い、鬼に責められる亡者となつたのであります。

我慢、高慢、それは悪魔のなす業であります。諸仏にはありませぬ。全ての教化をはねつける心、それは、「我」を追い出した悪魔であります。

釈尊は、今や菩提樹下に静座して、大勇猛心をおこし、もし正覚を成ずるにあらずばこの金剛のみ座を去らず、と誓いたまい、大精進に入られました。東雲の空は段々と晴れ、釈尊の正覚は近づくのであります。今や釈尊の「我」は彼の久遠のみ座にかえろうとします。霊の久遠のみ座は無量寿であり無量光であります。至心信樂であり、一心であります。

その時、釈尊の心中には種々の煩惱、妄想は勢いを逞たくましうして、その正覚をさまたげます。その様はあたかも百千億万無量の悪魔が、あるいは虎の如く、あるいは獅子の如く、大蛇の如く、あるいは鼓を鳴らし、剣を執り、矢を放ち、あらゆる方法によりてその正覚をさまたげます。けれど釈尊は少しも退転しませぬ。魔王はますます怒りて、大風をおこし、大雨を降らし、電雷となり、ついには魔の大群賊を全てくり出してさまたげます。あるいは魔女となつて秋波、艷口、以てその心を乱そうとします。

けれどもついには、悪魔は、本丸を侵すことは出来ませぬ。釈尊は、一切の悪魔を降伏せしめて正覚のみ座に「我」を見出されたのであります。無上正真道を体験せられたのであります。かくて釈尊は『法華経』にその本門を開顕して、久遠実成の仏だと申されました。

人は酔いきつた時、泣きます。芝居を見て泣きます。哀音を聞いて泣きます。芸術によつて泣きます。雄弁なる言説に泣きます。けれどもこうして酔うて泣くのは一時的であります。

人は又覚めきつて泣きます。罪を犯して罪に追われて、貪欲瞋恚の悪魔に追われて、牢獄の囚われ人になつた男が、冷たい牢屋の内に、眠れぬ夜を罪に目覚めて泣く涙は、自分の実相に目覚めて泣く涙であります。

「目覚めて泣く涙」そこにこそ、一切の問題は開けてきます。そこにこそ救済も信仰も生まれてきます。この涙こそ魂が久遠の宮居に復ろうとする働きであります。4 地獄一定の体験もここに生れます。

私はみ仏の慈悲の中に酔うことのみを持つて信仰と心得ることを好みませぬ。酔うことのうち何を産み出す力がありましょう。酔うている時は悪魔の心の裏に眠る時であります。単なる法悦に自分を見失うてはなりません。恩籠にいだかれた心の裏に、悪魔の群をかくしてはなりません。

さめた時、目覚めた時、そこには一切の悪魔の如き根強い軍勢が出てきます。かくてその悪魔に攻められて瘦せほそりたる「我」を見るのであります。一切の教化ははねつけようとする努力は悪魔最後の努力であります。

「帰去来、魔郷不可停、眩劫来流転、六道盡皆逕。」(定善義)

これは善導大師のお言葉であります。「帰去来、魔郷には停るべからず、眩劫より来、流転して、六道盡く皆逕たり。」と読んで、その味をとつて下さい。誰か「他郷を捨てて本国に帰る。」ことを願わないものがありました。

魔郷にとどまるとは悪魔の世界に在ることです。本尊を鬼にしていることでもあります。八万四千の悪魔に追われて、今日も明日も、かくて永久に、亡者の如く苦しむことでもあります。

こうした相にさめねばなりません。目覚めねばなりません。



『大無量寿経』は人類の生命の書であります。易行の大道は大経の上に開かれてあります。久遠のみ座に魂がかえりゆく姿が表されてあります。教えを示してあります。下巻、本願成就文のうちには「聞其名号信心歓喜」と一切衆生の道は「聞」ということによつて開かれることが説いてあります。

「親鸞におきては、ただ念しかして弥陀にたすけられまいらすべしとよきひとのおほせをこうぶりに信ずるほかに別の仔細なきなり」(歎異抄)

聞くのは、「よき人」のおおせであります。「よき人」とは真実に信じ得る人であります。善知識であります。善知識のある人は恵まれた人であります。「おほせをこうぶる」、仰せを聞くのであります。真実の生命道に生れ出づる道を何のわだかまりをも持たないで聞くのであります。「聞光力」とは「光の力をきく」のであります。阿弥陀仏の不可思議なる光明の威神力を聞くことによつて信念の世界に出づるのであります。

けれども一切の教化をしりぞける魂にとつては「聞く」こともまた難かしいことになつてしまいます。

「弥陀仏の本願念仏は、邪見憍慢の悪衆生、信樂受持すること、はなはだもつてかたし、難のなかの難、これにすぎたるはなし。」(正信偈)

邪見憍慢の悪衆生！の文字が如何に私どもの心に響くでしょう。これ故に一切人には自分が見えないのです。正法の前に頭が下らぬのです。一切の教えが心耳に入らぬのです。けれども悪衆生たる自分を見出した者はそのままではいられませぬ。

我慢な心に困りました。そうしてこれを取り去ろうとしました。けれどもこれを取り捨てることは出来ないものであります。けれども、しかし道は開いて来ました。

我慢をとり去つたと思う時、私どもは次の我慢に入るのであります。「高慢で我慢で仕方がありません。」と泣いたおじい様を横目から見た時、それはそのまま我慢の去つた尊い姿でありました。これは心の世界の神秘な有様であります。懺悔したと思う心は浅い心であります。懺悔もしてくれぬ自分を見出した者は、懺悔したなど呑気なことが言つてはいられませぬ。懺悔し得ぬ自分に泣いている者こそほんとの懺悔の人であります。「自慢高慢」の鼻を自力で折ろうとするはからいのなくなつたところにこそ、ほんとうに我慢の角は折れています。難行雑修とて、仏への道に嫌われる心は、この取りのけようとするはからい心でありました。

不思議や、一切ありのままの中に、「そのまま」の道は開けて来ます。

本丸の中から不思議なる世界が開かれ、久遠の宮居から不思議なる声は響いて来ました。

南無阿弥陀仏……

「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて、念仏申さんと思いたつところ」

それこそ、本丸の裏に起こつた勝ちどきであります。東雲の光よあけであります。そうして念仏は、弥陀のみ声であり、私の凱歌であります。亡者の如き我は、ここに立ち上

がつたのであります。仏は我と一体になりたもうたのであります。我はそのまま、炎王光仏と一体になって燃え上つたのであります。我は久遠のみ座にかえっています。もう仏の招喚の声と、我の憶ふところとの別はありません。仏の信はそのまま私の信であります。

こうした相を我が内に見いだした時、救われたと申します。こうした久遠のみ座にかえつた我を真我といひます。無量寿、無量光に生かされた我であります。ここに開かれてくる世界を価値世界といひます。

常に仏への世界を歩んでいます。一步一步の上に浄土が開かれています。心の内に仏の声を聞いています。一切善知識の発遣の声を聞いています。心に仏の声を聞き得る所のみ仏はいます。そうして仏のいるところには白道が開けています。白道とは不退の向上の道であります。本願一実の大道であります。生死の苦海を度る弘誓の船であります。この白道と、声と、真仏と、この三者は一つであります。一つのままが三つであります。三者はただ私の内の一つの名号となつて表れます。

悪魔が表れて来ます。けれどもそれは我をおかすことは出来ませぬ。彼らこそ抱きとられています。いかに彼らがおびこつても、それは本丸の主でなくて、一度死んで蘇つたる愛らしき客人であります。愛子であります。彼らがいればこそこの道は開いたのであります。彼らを愛してやりたい心になります。彼らこそいわゆる「逆謗の屍体」であります。逆謗とは悪魔であります。大信心海にうかぶ数多の悪魔を救つてやりたい心であります。

「名号不思議の海水は 逆謗の屍骸もとどまらず

衆悪の万川帰しぬれば 功德のうしほに一味なり。」(和讃)

これは親鸞聖人がこの世界を味われたものと思ひます。

久遠実成の弥陀……………十劫正覚の弥陀……………法蔵菩薩……………釈尊……………十方恒沙の諸仏……………かくて久遠のみ座は光にみちています。にぎやかな世界であります。